

第16回テーマ「透析クリニック」

透析だけにとどまらない 身体全体のトータルケアや 患者サービスが求められる 透析室

dialysis

本企画では、毎号診療所界隈におけるさまざまな気になるトピックをテーマに取り上げ、その最前線で活動する開業医たちとその分野の現状や今後の可能性について語ってもらう。第16回は、「透析クリニック」だ。

依然増加傾向の透析患者 透析中の過ごし方も重要？

日本透析学会が公表している「2020年慢性透析療法の現況」(回答施設数4437施設)によると、20年末時点の透析患者総数は34万7671人。うち通院患者は31万7004人、入院患者は3万667人だった。

同調査の経年推移をみると、同学会が調査を開始した1968年以降、透析患者数は年々増加しており、これは人工透析が必要な慢性腎臓病患者の有病数も表している。近年、増加率の伸びについては以前よりも鈍化しているものの、人口100万人当たりの透析患者は2754.3人と、国民の約400人に1人は透析患者であることになるわけだ。

新規透析導入患者数に関しては、20年末で4万744人と、19年の4万885人から若干減少しているが、08年調査以降は毎年増加と減少を繰り返しているため、ほぼ横ばいともいえるだろう。

このように、年々患者数が増え

ている透析だが、患者には必須であるが、時間的拘束や負担なども大きい。そのため、近年はより快適に透析を受けてもらうための配慮や工夫が、さまざまな透析診療所でも凝らされている印象だ。

また、透析患者の運動療法は、透析中の血圧低下防止といった効果が期待できるほか、身体機能の改善によるQOL向上にもつながるとし、透析中の時間を使ったりハビリなどのアプローチを行っているところもある。

これに関しては、22年度診療報酬改定でも「透析時運動指導等加算」(75点)が算定可能になると、今後実施医療機関は増えるものと思われる。

透析患者の安心・安全な治療やQOL向上にも寄与するため、各地の診療所ではどのような取り組みを行っているのか。今回は、各地の透析を提供する3診療所に、自院における取り組みについて話を聞いた。

河北総合病院との密な連携で 運動・栄養指導の体制を強化

社会医療法人河北医療財団河北透析クリニック（東京都杉並区）

河北総合病院と連携 付加価値の高い透析治療へ

河北透析クリニックは、東京都杉並区およびその周辺地域における急性期医療の中核機能を担っている、河北総合病院・分院（407床）を母体にもつ、透析専門診療所である。

杉並区のほか、中野区や練馬区といった周辺区から透析患者が通院しており、現在の登録患者数は、196人だ。スタッフは常勤・非常勤を含め、医師、看護師、臨床工学士、事務、患者送迎サービスを行うドライバー、事務補助を



青木尚子・河北透析クリニック院長

担うアテンダント——などが在籍し、さらに、河北総合病院の管理栄養士や理学療法士といったコメディカルとの連携も強化している。

病院グループが母体である利点を最大限に活かし、透析治療だけにとどまらず、高齢患者を中心に身体機能や栄養状態へのきめ細かなアプローチによって、透析患者のトータルなQOL向上に資する医療サービスに力を入れているのが特徴である。

「たとえば、コロナ禍では従来からある透析施設向けの感染予防ガイドラインをもとに、肅々と感染防御に努めました。ただ、ワクチン接種後の副反応を想定しワクチンスケジュールを把握するといった細かな業務の増加や、隔離室での発熱者対応など、やはりスタッフの業務負担は増えました。そうしたなかで、河北総合病院の感染

対策委員会や薬剤部などと連携しながら対応を進められたのはよかったです」と、青木尚子院長は振り返る。

透析中の運動指導継続で 身体機能向上にも寄与

そんな同院の透析患者へのアプローチの一つに、透析中の運動指導がある。高齢患者のフレイル予防や体力維持などを目的に、透析中にもできる下肢中心の運動メニューを河北総合病院の理学療法士監修で構築。基本的にすべての患者に對しすすめている。

また、同院オリジナルの「透析運動ノート」を患者に配布しており、患者はこれに毎回の運動回数を記入しスタッフが指導後に確認印を押すという流れになっている。記録することで成果を可視化し、モチベーションの維持に寄与しているという。

2018年の開業当初から運動指導を続けてきたが、成果は確実に表れていると、青木院長は語る。「きちんと続けていた患者さんは、体力維持はもちろん、人によっては向上の傾向もありました。劇的な変化ではありませんが、『透

析運動ノート』の記録と実際の患者さんの動きや見た目の変化は運動している印象です。また、コロナ禍で一時期いつもどおりの運動指導ができないことがあったのですが、その際に患者さんのほうから『またリハビリしたいな』といった言葉をいただくことがあり、私たちが思っていた以上に患者さんに根づいていたのは、スタッフたちもうれしかったようです」

なお、2022年度診療報酬改定では、透析中の患者に対する運動指導等への加算が新設された。開院当初からの同院の取り組みが、診療報酬上でも評価されるようになったといえる。

また、透析日以外にもリハビリをしたいという患者ニーズがあったことから、18年9月にはリハビリスペースも新設し、心臓リハを実施している（現在は感染リスクを考慮して利用縮小中）。

定期的な栄養評価のほか 栄養剤や宅配食も紹介

さらに同院では、河北総合病院の管理栄養士と連携し、半年に1回の頻度ですべての患者に対し栄養スクリーニングを実施してい



透析中に運動指導を受ける患者たち

る。そして、中々高リスクの患者については管理栄養士が、無く低リスクについては看護師などが中心となつて栄養指導を行うのだ。さらに、院内では透析やその間の運動中にも摂取しやすい各種栄養ドリンクも販売。低栄養者向けや、運動後に飲むと筋力アップに効果的なタイプ、また、嚥下しにくい人向けのゼリー飲料など、患者ごとの用途に合わせてすすめるように取り揃えている。



河北総合病院の管理栄養士と連携し、栄養指導にも注力

「軽に飲めるというメリットがあります」(青木院長)

それ以外にも、透析患者が入所している介護施設と連携して日頃からの栄養指導の体制を整備したり、独居患者については、減塩食や栄養補助食などのメニューにも対応している宅配食サービスを紹介したりしているという。

「開業以降、河北総合病院の栄養科との協力体制もより密にできたので、年2回の定期的なスクリーニングとは別に、月4回ほど管理栄養士が来て栄養相談を受けられる機会も設けています。さらに、今年からは高リスクの患者さんの栄養指導後、管理栄養士が適宜フォローアップに入るとい

うシ

STEMづくりも始めています」と、青木院長。低リスクの段階から相談・フォローの機会をつくり、高リスク患者には専門職がしっかりと介入していく体制を目指すという。

今後の展望について青木院長は、「やりたいことや課題はまだまだある」とし、たとえば、コロナ禍での業務負担増も受け、スタッフの働き方や院内オペレーションを見直し、患者の運動や栄養指導に注力できるようにするのは、目下の課題だという。口腔ケアや嚥下リハビリなどの領域にも

将来的に着手し、透析患者さんのよりトータルな全身管理に介入できればと考えているという。

「また、重要だと感じているのが、ACPです。当院でも以前から高齢患者さんなどの病態が悪くなりそうな方は、ご家族も含め確認するようにしていましたが、それ以外の患者さんにも急性増悪や心血管疾患のリスクがあるので、今後はすべての患者さんとご自身の人生について一緒に考えられる仕組みづくりを、当院でも進めるべきだろうと思っています」